彼方のなく頃にタイムスリップ編

ＣＩＡ捜査官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼方のなく頃にタイムスリップ編

【Ｎコード】
Ｎ０４４７Ｍ

【作者名】
ＣＩＡ捜査官

【あらすじ】
この小説は多くの駄文要素を含んでいます。
歪みねぇという賛美の心
だらしねぇという戒めの心
しょうがないという許容の心を持ってる方と駄文でもいいぜという方は是非読んでいってください。

主人公紹介（前書き）

兄「あぁん…作者最近だらしねぇし」

主人公紹介

名前　佐々木彼方（かなり親しいか信頼している人のみ知っている。）偽名を使うことが多い麻生太郎、渡辺寛など（思いつきで名前を言っている。）

身長１７８、９くらい。

性別　男

２０歳

髪は黒で短髪。

基本的に軍服かスーツ。

ルックスはいいが、恋というものに興味を持ったことがないのできずかない。（鈍感なわけではない。）

キレると見境がなくなるらしい（ほとんどキレる事はない。）場合状況に応じて言葉遣い、態度が変わる。でも砕けた言い方が多い。初対面には丁寧に接する。

演技がうまい。目が細くコンプレックス（視力は低くない。）軍隊経験がある。（４年）ＣＩＡ、ＦＢＩ、ＳＷＡＴ、スペツナズにも２年勤めている。（掛け持ちで、給料が今のイチローの２０倍くらい。）

身体能力は化け物この一言につきる。武器は銃が得意。

刀を持っている。

名前は琥珀。技に一閃切や百人切、琥珀疾風ぎりなどが使える。
その場から抜け出すのがうまい。逃げ足が身体能力の上をいく。
主人公のよびかた軍曹、超人、コードネーム００７など、（本当の
階級は大将、でも本人はまんざらでも無い様子。）

マクドナルドのファンである。

実際彼がアメリカと日本の支配者といっていいほど権力がある。
大統領とも仲がいい。よく寿司を持っていく。

名前　工藤澪

性別　女

髪は黒で長く結っている。

彼方の側近大体彼方の家にいる。階級は大佐。
性格は穏やかで優しいがサディスティックなところがある。本人は
自覚がない。
料理が上手で三ツ星の評価を受けたこともある。常に笑顔、年齢は
１８歳。身長は１７４。
体型はボンキュッボンであるかなりいい。なのでナンパをよくされ
るが、断っている。
かなり強い。刀を持っている。名前は白龍
彼方と同じく一閃切や１００人切ができる。必殺技に悪人抜刀善人
帯刀という技かある。
よく大佐と呼ばれる。
本名を知っているのは彼方と親と一部の人間だけ。

兵士の間では一人で戦争を終わらせた美女や戦争をやめさせる美女とも呼ばれることがある。彼方のいわいる右腕。

スネーク

性別　男

世界を何度も救っている男。
急にひぐらしのなく頃にの世界に飛ばされたがなぜか冷静。
むしろ楽しんでいるのかもしれない。
このスネークはエロくない普通のスネーク。
ただ食に関してはかなりうるさい。

主人公紹介（後書き）

ＰＶ一万越えました。ありがとうございます。

第一の世界～第一話これが噂のバットエンドか。～（前書き）

改行しました。

第一の世界～第一話これが噂のバットエンドか。～

昭和５８年６月
俺は佐々木彼方日本人だ。
なんでこの世界にいるかと言うと知らん。
それが分からないから困ってるんだ。
そんなことを考えていると少年Ａと少女Ａの話し声が聞こえた。

「圭一君おっはよう」

「レナおはよう」

俺はナイフを取り出していた。

「いけねぇいけねぇつい癖でやっちまうぜ」

「「誰かいるのか？（かな？）」」

「ニャンニャンニャゴオ」

これは苦しいがごまかせたか？

「なんだ猫かレナ早くいこうぜ」

「うん」

ふーう助かったぜ。
俺はとりあえずさっきの奴らについてくことにした。
少年をつけているときに思ったのだが家があれだな昔の家だな。

もはや昔というレベルじゃない気もするがそこは気にしない。
これが夢なら早く覚めてほしいね。

「俺の学校より小さいな。さてこれからどうするか…」

分校についたはいいがすることが無い。
まさか堂々と入っていく訳にもいかないし。
まあとりあえず森で野宿することにした。

久しぶりに野宿か、いつもならまだテントがあるんだがまあ贅沢はいってられないな。
近くの川から取ってきた魚を焼いて食べていたら近くに気配を感じた。

「（誰だ？）」

焚き火の火を消してすぐに草むらに隠れた。

「あんれぇ～今ここに誰かいなかったかい？」

「気のせいじゃろう。少し飲みすぎたから幻覚でも見えたんじゃろ。
ほら誰もおらんじゃないか」

草むらに懐中電灯の光が当てられる。
幸い焚き火の後は見えていなかったようなので助かった。
今更だが思ったなんで俺隠れてるんだ？そうだよな悪いことをした

訳じゃあるまいし。
なんか本能的っていうかなんというか。俺少し神経質になってるのか？
多分体が勝手に反応して見えるもの全てを敵とみなしてしまっているのだろう。
「少し戦場に立ちすぎたか？まあいいとりあえず眠る場所を確保したいしな」
辺りを見渡す真っ暗で何も見えないよく考えれば普通だったな。
暗闇になれるのに少し待つ。
「……ｚｚｚ」

「ｚｚｚん？っは！！もう朝か？俺はここで一晩過ごしてしまったというのか？」
目を開けると辺りは明るくなっていた。
まさかこんなところで眠ってしまうとは。
風邪はひかないだろうが流石にここで寝るのは人としてヤバい。
まあ辺りから爆弾がとんでこないだけましか。
「さてととりあえず人が住んでるところに行きますか」

なんて言ったってどっちがどっちかわからないんだ。
ＧＰＳは使えないし携帯は圏外しかもここら辺の家は昔ときたもんだ。

「これは夢だよな。どうせ目が覚めればいつも通り戦場に行って人を殺してるはずだ」

森をかなり歩いたそうだな2、3時間は歩いてたかもな。
とりあえずこれは現実ということにしてだ。
なんか変な感じがする。気配が無い。
いくら人口が少ない村でも気配ぐらいはあるだろう。
その場にしゃがみ込んで少し力を出す。

辺りを探るように探す…が本当に何も感じない。

「どうなってるんだ？」

まさか村が滅んだとかじゃないだろうな？
村が邪魔だから政府が消したとか。冗談じゃないぞ。
元にそういうこともよくあるんだ。
原因はよく分からんが病気とか人種とか色々あるが殺される人たちから見れば理不尽でしかない。

と、まあその話は置いておいて今はここら辺がどうなってるかを調べたいがどうしようもないな。

結局そこからまた数時間歩いてやっと森から出られた。
そこで目にしたのはありえないものだった。

「可哀想にまだこんなに若いのに」

「ああ、まったくだ。まさかガスが発生するとはねぇ」

死体袋ばかりだった。
それを多分自衛隊の連中だろう、運んでいる。
その数も相当ある。俺の見えてる範囲でも２００は並んでる。
しかもこの匂いはガスと言っても火山性のガスじゃないな。
まさか人為的なものとか？

「この村に昨日の夜、何があったんだ？」

そう考えていると急に立ちくらみに襲われる。

「ぐっ！！何だ？」

そこでふっ、と意識が飛んだ。

「っは！！ここは？」

見慣れないというかもはや現世とは思えなかった。
まさに異次元空間という言葉がぴったりあっていた。
誰かの声が聞こえる。

「梨…を助…て。お…願い…です」

言葉は途切れ途切れだが誰かを助けてほしいというのはわかった。

そして俺を明るい光が包んだ。

「なんだこれは？うおお吸い込まれる」

そうして気づいたときはどこかに立っていた。

第一の世界～第一話これが噂のバットエンドか。～（後書き）

みてくださってるみなさんありがとうございます。

～第二章～改造駄目絶対（ＲＰＧ的な意味で。）（前書き）

改行しました読みずらいの文才がないからです。

～第二章～改造駄目絶対（ＲＰＧ的な意味で。）

俺は街が見える高台に立っていた。
ここは？にしてもあれはなんだったんだ？

「梨花？を助けてください？」

彼女は俺に助けを求めたのか？
まあいい今はとりあえず泊まれるところを捜そう。

「今日は早く寝たいぜ」

とりあえず、そこら辺の下宿屋を見つけることができた。
この街の名前は興宮と言うらしい。
今は宿にいる。

「さて、武器の確認でもするか」

バックから銃を取り出す。

「デザートイーグル、Ｍ８７０、モシン・ナガン、Ｍ４カービン、Ｐ－９０、ＲＰＧ－７、ＳＡＡ狙撃消音銃、弾確認いずれも銃器に異常なし」

それにしてもあの発言が気になる。
助けて、か。俺に何をしろとせめて大雑把でいいから何をすればいいか教えてくれよ。
そんなことを考えながら眠りについた。

～翌日～

今のところは暇だ。というかもう落ち着いた。
ここは異世界ということがよーく分かったのでそれ以上は考えないようにした。
カレンダーを見たんだが昭和５７年だそうだ。
そこら辺の店で新聞を買ったんだが、あの事件のことが乗ってなかった。
とりあえずファミレスで食事中だ。エンジェルモートとか言ってたかな？

「すみませんＡランチお願いします」

「かしこまりました」

数１０分たってから料理が運ばれてくる。

「お待たせしました」

「ありがとう」

むしゃむしゃ

「中々美味い」

自分で言って失礼なことを言ったと思った。

「まぁいいか。さて勘定をして帰るか」

「きゃあ」

店に女の子の悲鳴が響き渡る。
「へっへっへっいいじゃないか」
「止めて下さい」
流石に見捨てる訳にもいかないので助けに入る。
「止めてやれ。嫌がってるじゃないか」
「何だお前は、殺されてえのか！」
短気は損気だぜ？そいつを今から教えてやる。
「それはこっちの台詞だ、怪我したくなかったらさっさと失せな！」
「いわせておけば！！容赦せえへんで」
客が殴り掛かってくる。
それを避けてカウンターをした。
男の顔面に見事にパンチが決まって男が気絶する。
「ぐほっ」
客はその場に倒れ込む。
「お客様大丈夫でしたか？」
「ええこう見えても鍛えてますから」

先ほどからまれていた少女が話しかけてくる。

「ありがとうございました。私、園崎詩音です。あなたの名前は？」

「渡辺寛です。以後お見知りおきを」

「どこかで会ったことあるっけ？」

「ないと思いますが」

「まぁ、どうでもいいですけど」

どうでもいいのか？またダイナミックな人だなぁ。

「これからよろしくね」

「はい、よろしくお願いします。会計を、お願いしてもいいですか」

「かしこまりました」

「私が払いますよ」

先ほどの少女詩音はそう言うが流石にそれは気が引けるので自分で払う。

「いえ、お構いなく」

「４９０円になります」

「はい」

「ちょうどお預かりします」

「じゃあまた今度」

「はい」

挨拶をして店を出る。

「ありがとうございました・・・詩音、彼強かったね」

「でもあの強さは異常ですよ。声とか喋り方も変わってましたし」

(でもまあ悪い気はしませんでしたけどね♪)

「やっぱりまずかったかなぁ」

盗聴器から聞こえる声を聞いていう。

あれ今きずいたけどこれ犯罪じゃね。まっいっか。

なんとなく気まぐれで図書館に行きたくなったので行くことにした。

「さて、図書館にでもいこうかな」

〜図書館〜

「田舎のわりにはでかいな。青森よりでかいんじゃないか?」

という疑問を抱きつつも、図書館にはいっていった。

ぶらっとしてみて気になった本をとって見る。

「雛見沢の歴史、か」

そいつは変な本だった。
４００年前の話から最近と言っても去年じゃ無く来年の話らしい。
昭和５８年に雛見沢大災害と書いてある。
たぶん昨日いや一昨日か？の出来事だろう。
そうやって本に釘づけになっていると女性に話しかけられる。

「あらぁ～あなたもしかして雛見沢の歴史に興味があるのかしら」

「はいそうですが」

「よかったら聞かせてあげましょうか？」

「では、お言葉に甘えて」

～2時間後～

「もうこんな時間？じゃあこの話はまた今度にしましょう」

「ありがとうございました」

「気にしなくていいのよ」

長い話だったぜ。あの人ほど雛見沢の歴史に興味を持っている人もいないだろうな。
まあ、おかけで暗い過去が分かったわけだ。しかしどうも国がからんでそうな感じがするぜ。
データベースにハッキングか、気が進まないが、やる価値はあるだ

ろう。よおしやるぞ！

〜1時間後〜

「こんなもんだろ、流石昭和、システムが古くて助かるぜ。成る程、雛見沢症候群か、厄介なことになりそうだな。入江機関ねぇ。症候群の研究機関か潜入するのは意外と難しいな」

不意にドアが叩かれる。

「はい、今開けます」

「彼方か？」

「いいところに来た。ちょっとこっちにきてくれ」

ごめん今俺相当驚いてるわ。
スネークがなんでここにいるのか聞かないことにする面倒な話になりそうだから。

「それより、今の状況を教えてくれ」

「了解」

〜青年説明中〜

「簡単に言うと異世界ということか」

「簡単にいうとそうなる」

本当は平行世界とかもっと難しい話なんだろうけどそこは知りたくもないのでほっとく。

「夢のある話しだといいたいところだが、今、現実に俺はここにいる。信じがたいがな。ところでさっきいっていた、用件はなんだ？」

「流石話しが早いな、助かるよ。実は隣の村の研究所からデータファイルをこのカメラで撮ってきてほしい」

「いくら日本とはいえ彼方が頼むんだ。やっかいな仕事なんだな」

「そういうことだ。詳しいことは分かってないが、武装してるのは分かった。後、俺のことは寛と呼んでくれ」

「了解。で、作戦内容は？」

「その施設を秘密裏に守ってる、部隊に変装してもらう、あとこれはカードだ。なくさないでくれよ。それがないと入れないから」

え？手回しが良すぎるって？かりにもそういう仕事をしてた人間ですから。

1分あれば充分すぎるくらいだ。

「分かった」

「じゃあいこうか。車で。外で待っててくれ」

「待たせたな」

「普通の車だな、装甲以外はな」

装甲最初からついてたぞというかこれ盗品だからすぐそこからかりて着ただけだから。
ちゃんと返えすぞ？借りてるだけだからな。

「当たり前だ、銃で武装してるんだからな。これが研究所内の、見取り図だ。一回はカモフラージュのため普通の診療所だ。そしてここから、地下に行くと、研究施設だ」

「分かった」

「見つかったらまずいぞ。見つかったら、人のいるところに行け、すぐに迎えに行く。後、こいつを持って行け。ＭＫ．２２ピストルとＭ４カービン、マスターキーつきだ」

「流石、準備が早いな」

「これも仕事のうちだからな」

そう２０００人の命を救うためのな。

「何分かかるんだ」

「車で2、３０分くらいだな」

～３０分後～

「ついたぞ」

「意外に広い村だな。山も多い、戦略的に有利になれるな」

「来年もしかしたら戦争になるかもしれん」

「こんな平和な村でか？」

日本なら確かにそう思うだろうが相手が国なら話は別だ。
何をしてくるか分かったもんじゃない。

「今じゃ珍しくもない」

「確かにな」

「まぁこれには国が関わってるからな（多分）」

「どこでも上層部は腐ってるのか」

「今からその証拠を持ってきてもらうんだけどな」

こいつは人の命を助けると同時にバカな政治家どもを地の底まで落とすことができる。
つまり俺たちはでかいことをやるのさ少し過激になってもな。

「成る程な」

「着いたぞ、行ってこい」

「分かった」

～５０分後～

「待たせたな」
「うまくいったようだな」
「あぁ、相手はきずいてない」
「流石はプロだ。しかし、相手もばかじゃないようだ」
白いワンボックスカーが追いかけてきている。
「追っ手か」
「ＲＰＧがあるぞ」
「よし撃っていいんだな」
「勿論、証拠隠滅は奴らがやってくれる」
そう俺たちは何もしなくてもいいのさどうせ事故で片付けてくれる。
「こちら鳳４本部応答願う」
「こちら本部なにかあったのか」
「前方車両いまだ走行中、このままだと町に抜けます」
「町にはいかせるな。発砲許可は出ている」
（この時期になんでこんな騒ぎが起こるんですかね）

「了解、攻撃します」

「ＲＰＧだ！！」

「どういうことだ。応答しろ」

ザアー

「くそっ」

「どうなってるの小此木」

「実は不審車両を追っていたところ、ＲＰＧで攻撃を受けたらしくて」

「何者なの？」

「もしかしたら、東京の連中かも知れません」

一方その頃

「派手に飛んだな」

「改良してるだろう。明らかに爆発が強いぞ」

流石スネーク見る目がある～。

「ちょっといじっただけだ。それに誰も死んでない。何はともあれ、スネークのおかげ

で何の組織か何故国が動いているのかわかったよ」

「そうかこの資料は国家機密なのか」
「まぁそうなる。でも警備は今までで一番薄かっただろう」
「装備、情報がそろってたからだ」
「あの組織はサービスが悪いんだな」
「まぁ、仕方ないさ。兵士は駒だと思ってる奴らだ」
「相変わらず上層部はそんな考え方ですか。変わらないな」
「まったくだ。人は変わるというが、あいつらだけは変わらないな」
「何にしてもご苦労様」
〜30分後〜
「車を運転したのは久しぶりだった」
スネークと一緒にぽっぽと帰ってきた。
もちろん車はバレないように返してきたぞ。
「免許持ってるのか」
「一応な。この世界じゃ、つかえるかどうかわからんがな」
「頼むから、捕まるのだけはやめてくれよ」

「大丈夫、いざとなったら逃げるから」

「確かにお前なら出来そうだよ」

もちろん逃げ足だけは世界一だと自負してますから。
それに道路を走るくらいなら免許なんていらんだろ。

その日はもう疲れたので（精神的に）すぐに寝た。
太らなきゃいいけどなんて考えながら。

～第二章～改造駄目絶対（ＲＰＧ的な意味で。）（後書き）

こんな小説でも読んでくれる人がいることに感動した。

～第三話～仕事もなにもやりたい放題。（前書き）

相変わらず駄文です。
これから銃や戦車等もだす予定です。

～第三話～仕事もなにもやりたい放題。

「五年目まで後だいたい一年か」

五年目、つまり雛見沢の最後を意味している。
来年あの村は滅菌ではなく災害ということで政府に消される。

「資料を見たんだが、雛見沢症候群ってのはなんなんだ？」

「雛見沢症候群ってのは、レベルがあってあがっていくほど危ない。例を挙げると、そうだな疑心暗鬼になったり、被害妄想をしたりして人に襲い掛かったりする。そして最後は首を掻きむしって死ぬ」

まあかったらほぼ確実に死亡っていう怖い病気だ。

「随分物騒じゃないか」

「そういう病気なんだ」

「病気や自然災害ほど恐ろしいものはないな」

「自然災害はいくら科学が発展しても制御出来ないからな」

生活習慣の問題なんだろうけどね。

「話が逸れたが、これからどうするんだ？」

「勿論来年までは入江診療所、東京の調査及び、雛見沢症候群の治療薬の開発に専念する」

「つまりそれまでは別行動か」
「流石スネーク、その通りだ」
「俺は何をすればいい？」
「入江診療所の監視だな。怪しいことがあったら一ヶ月に一回会合を開くから、そのときに報告してくれ」
俺は東京で探ってくることと治療薬の開発かぁ。
治療薬の開発どうしよう？大丈夫だとは思うけど。
「わかった。じゃあ入江診療所の監視だな。現地人との接触は？」
「ＯＫだ。あの村なら交流があったほうがいいだろう。でも診療所の連中の接触はやめてくれ」
ばれると後々の作戦に支障がでるからな。
「それもいいな。作戦は後で練ることにしよう」
「じゃあ早速明日から行動開始といこう」
「了解」
そうして別行動をしてたわけだが一気に飛んで一年後。
「一年前に盗んできた資料に書いてあったとうり、北条沙都子は入江機関から、研究の見返りとして金を貰ってる。それで約一年間調

査したんだが、入江機関から以外にも
一ヶ月5～600万くらい通帳に入ってる」
「入れるとしたら一体誰が？」
今何をしてるかって？
会合さ互いに知り得た情報を交換しあってるのさ。
「それがわからん。振込みは興宮になってたが」
「沙都子の家族は二年目の祟りでいないはず叔母もいないし後は叔父くらいか」
叔母は去年殺された。表向きはヤクで頭がいかれた奴が殺したことになってるが。
「その叔父って奴はどんな奴なんだ？」
「さあ？でも一人暮らしさせてるんだからあんまりいいとは言えないんじゃない？」
「そんな奴から金が来るか？」
「はっきりとはいえないが叔父の可能性が高いだろうな」
「後は得に動きは無かった。後は山狗の兵士が563人増えた」
「500だって！何で今頃・・・」
派手に動きすぎたか？

「何か企んでるのかもしれない」
「参ったな。まぁいい雛見沢に行くぞ」
「これからか」
「勿論。引っ越してやつさ」
あくまでも俺たちは一般人としてだけどな。
「成る程」
〜2日経過〜
「園崎にもいったし一端は落ち着いたな」
あの園崎のばあちゃんの威力はとんでもないねありゃまだまだ頭首を続けられそうだ。
「誰か表にいるぞ」
「どれどれ。どうやらパーティーのお誘いのようだ」
がちゃ。扉が開く。
「君は？」
「僕は古手梨花なのです」

「寛、夕食カップラーメンしかないぞ」

「俺が作るよ。スネークは座って待っててくれ」

「それでこの村には何をしにきたのですか？」

この少女は引っ越してきた家に急に乗り込んできて何を言うんだ。まさかでていけ！！とかじゃないだろうな。

「ちょっと帰る方法を探してるのさ。それでたまたまこの村に引っ越してきたってわけだ」

正直に言ってやった。その少女は顔色一つ変えずにこう言った。

「わかってるんでしょ。あなたは全部ね。それで力を貸してくれるのかしら？」

普通の人に言ってたら救急車を呼ぶところだが俺は普通の人じゃないんでね。

そこは理解できた。こいつがこの村の２０００人の命を背負ってるも同然ってのがな。

「いいぞ、といいたいところだか、このままだとまたバットエンドだろう。だからお前が本当の奇跡と人生にきずけるまでは俺は手を貸さない。わかったか？」

「貴方に何がわかるっていうのよ！！」

おお怖い怖い。

「わかるね、馬鹿野郎だ。違うか。それとも隣のくそったれのせいか。はっきり言わせてもらうが、お前は本当に仲間を信じて守りたいと思ってるのか？」

「当たり前じゃない！」

「嘘だろ、もし本当なら諦めずに仲間と戦うはずだ。たとえ一人でも、突っ込んでく覚悟があるはずだ。ところがどうだ何かあったらすぐに希望を持ったり、直ぐに諦めたり、それはな仲間なんか信じちゃいないんだよ。結局お前は自分の事しか考えてないんだよ。自分はもう死んでもいいや？ふざけるな！！てめぇはいくらでも生き返るかもしれねぇが、仲間は命一個しかねんだよ。お前みたいな薄情者でもな心配する奴がいるんだよ、死んで悲しむ人間がいるんだよ。お前が死んだ数だけ悲しんでる。それこそ、仲間がいるんだよそれだけは忘れるな！」

「・・・・・」

梨花は何も言わずに黙ってでていった。

「さぁ、これで本当の奇跡と仲間の大切さにきずけるかどうかだな」

偉そうなことを言っていたが、俺だって人のことは言えないんだけどな。

今ここにいるのはスネークや澪のおかげなんだからな。

「随分熱くなってたんじゃないか」

「そりゃあ、子供に正しい道を歩ませるのも大人の仕事ですから」

「ふっ、笑えるな」

別にたまにはいいことしたってバチはあたらんだろ？

「うっ。そんなことより料理料理。俺はフランス料理位しかできないからそれで我慢してくれ」

「わかった」（フランス料理ができたら充分だろ。）

「何か言った？」

失礼なこと考えてたんだろうなぁ。

「いや、何も」

食事を食べ終わった後、風呂を沸かして入った。その後は入江診療所の監視をした。

「流石に夏でも夜は寒いな。うぅー、腹減ったなぁー。試作品のカップラーメンでも食べるか」

なんとお湯を入れて３０秒という驚異的なカップラーメンである。スネークが作ったものはおいしいし野戦食としてはいいものばかりだ。

「あぁ美味しかった」

食うのが速すぎるって？しょうがないだろ食べてる間に動きがあったら困るしな。

～翌日～

「さて帰るか。走るか」

～1秒後～

「ただいま」

「早かったじゃないか何かあったのか？」

「特に何も無いけど、俺はこれから仕事があるんだよ」

実は臨時教員として雛見沢分校に行くことになったのさ。

書類云々の改変は得意だからな。

「そうだったのか」

「入江診療所の監視を頼むよ。祭までは特に何も無いと思うけど」

「まぁ、しょうがないか」

「じゃあ朝食だ。今日はマグロの刺身となめこ汁とご飯」

「朝からマグロか、豪華だな」

「金は有り余ってるからね。これはとってきたものだけど」

（どこからとってきたんだ？）

朝食を食べ終えて直ぐに学校に向かった。

「学校か・・久しぶりだなぁ♪」
俺みたいな奴でも一応高校までは通ってたんだぞ。
ただ仕事の都合上休むことが多かったが。
「圭一君おっはよー」
「相変わらずはえぇな。たまには朝寝坊してもいいんだぜ？」
「圭一を待たせるわけにいかないよ」
「おっ、いつぞやの少年Ａと少女Ａじゃ無いか。よーし。あのすみません。私、渡辺寛という者ですが、雛見沢分校は何処にあるのか教えてくれませんか？」
「俺達と一緒でいいなら案内しますけど」
「是非お願いします」
「圭一君まだ魅ぃちゃんが来てないよ」
「そうだったな、忘れるところだったぜ」
何気にひどいですね。
「ごめん圭ちゃん遅くなったよ。あれこちらの方は？」
「私、渡辺寛と申します」

と少女Bに自己紹介しておく。

「よしじゃあ走るよ」

「お、おい魅音」

「ちょっと待ってよ、魅ぃちゃん」

「はは楽しそうでいいですね」

～雛見沢分校昇降口前～

「はぁ、はぁ、はあよく、はぁ、息切れしないな。はぁはぁ」

「圭ちゃんもまだまだだね」

「寛さんは息切れしてないですけど、スポーツでもやっていたんですか？」

「いえ、田舎の出身だから無駄に体力がついただけだと思います」

「寛さんも田舎出身か。寛さんは学校に何の用で来たんですか？」

「ちょっとね。おっとここでお別れのようです。それではまた」

彼方はそういい職員室に入っていった。

「失礼します」

「私この分校の教師をしております、知恵留美子と申します。あな

たが臨時教諭の渡辺寛さんですね？」

「はい、私が渡辺寛です。よろしくお願いします」

こういう仕事ってやったことないからちょっと緊張するぜ。

「こちらこそよろしくお願いします。では教室で自己紹介をしてもらうのでこちらにいらしてください」

「わかりました」

そうして教室の前まできて知恵先生が扉を開けたとき、いや特に何も起きなかった。ただ焦ってる圭一がいたが。

「今日からこの学校の教師になる渡辺寛さんです。それでは自己紹介をどうぞ」

「今日から皆さんの副担任になります。渡辺寛と申します。たいしたことはできない若輩者ですが、よろしくお願いします」

まあこの学校俺を入れても3人しかいないみたいだが。

「では一時時間目は質問タイムとします」

「よーしじゃ、まずおじさんからいかせとかてもらうよ。ずばり好きな食べ物は！」

「しゃぶしゃぶかな。冬場は最高にうまいよ、安いしね。後は、ビーフカレーとかかな」

「カレー？」

「さすが知恵先生即座に反応した」

「豆腐は好きですか？」

「胡麻豆腐が好きかな」

胡麻豆腐は結構うまい！

というふうに質問攻めにあった。そして放課後。

「よし本日の部活を開始するよ」

「部活なんだそりゃ、何をする部活なんだ」

「よくぞ聞いてくれた。我が部は複雑化する社会に対応するために、あらゆる・・」

「つまり、皆で楽しくゲームをする部活なのですよ」

「俺も入れるのか？」

「私は良いけど、他の皆がいいかだね」

「僕は別に構わないのですよ」

「レナも異議な～し」

もはや入れられることは強制のようだ。

「貧民風情が私に勝てるとは到底思いませんわね」
「よし決まりだね。じゃこれから前原圭一の入部試験を開始する」
「俺は何をすれば良いんだ？」
「私達と戦ってもらうよ」
「皆楽しそうだね」
出席簿を忘れるとはやっぱり俺先生むいてないのかな？
「寛先生。何か忘れ物ですか？」
「出席簿を忘れちゃってね。後黒いバックを忘れたんだけど見なかったかい？」
「これですか？」
「はいそれです」
それの中には重火器の類が入ってるから速く取り返したいんだよね。
「しかし、ただで返すわけにはいかないね。私達とトランプで勝負してもらうよ」
「構いませんよ」
「よしじゃあ、シンプルにばば抜きでどうだい？」

よくわからんが参加することになってしまったようだ。

「「「「「いいんじゃねぇか。（かな。ですわー。みー。）良いと思いますよ」」」」」

「よしこれでやるよ」

「魅ぃちゃんそれでやるの」

「もちろん初心者とはいえ部活だからね。全力でいかせてもらうよ」

「おもしれぇ。やってやるぜ」

はーんカードに傷がついてるしかも普段からゲームをやってる子供たちはすべてわかってると。

「はぅ、手加減してね」

「お手柔らかに」

「よしじゃあやるよ」

「シャッフルは私にさせてくれないかな？」

俺がシャッフルすれば俺の勝ちが確定する俗に言うイカサマってやつだ。

「別に構わないよ」

「じゃあいきますよ」
彼方がシャッフルしカードを配る。
〜第一回戦〜
「上がりました」
「「「「えっ！？」」」」
「カードが全部揃ってました」
「こういう事もあるもんなんだね」
「運がよかったです」
〜第二回戦〜
「じゃいきますよ」
またカードを配る。
もちろん俺のは全部揃うように配ってるが。
「あがりです」
「また！？運がいいね。まぁ部活は勝つためには何をしてもいいからね」
「さっきからどうして勝てないんだ？」

「圭ちゃんもまだまだってことだよ」

初心者にイカサマとはひどいが勝負の世界とは非常なのさ。許せ圭一！

「ちくしょうーー」

～第三回戦～

「今度はおじさんが切るね」

今度は魅音がかなりシャッフルする。たぶん俺のカードを揃えさせないためだろう。

だが甘い！魅音がトランプを置く瞬間にカードの順番を入れ替える。俺にくるようにな。

「よし全員に渡ったね」

「あがりです」

「すごいね。はぅ～」

「まぁ運がよかっただけですよ」

～結果発表全合計～

「寛先生が圧倒勝利だね。ビリは圭ちゃん、さてビリには罰ゲームだよ」

「やめろやめてくれ。アッーーーーー」

罰ゲームを実行された圭一には目も当てられない惨状だったね。冗談抜きで。
まあ、なんやかんやで家に帰ってきた。

「ただいま」

「今日も入江診療所に異常は無しだ」

「お帰りくらいいってくれてもいいのに」

「なにかいったか」

「別に何も。夕飯の準備するから、お風呂沸かしておいて」

冷たいやつだ。

「わかった」

～第三話～仕事もなにもやりたい放題。（後書き）

文才プリーズ！！

～第四話～運命？鼻であしらてっやるよ。（前書き）

相変わらず駄文です。時報はもういやだ～！
改悪しました。
どうしてこんなことに…。

～第四話～運命？鼻であしらてっやるよ。

～翌日～

「朝食と昼食置いていくから、あたためて食べて」

「わかった。ところで何を急いでるんだ」

「学校に遅れそうなんだ」

「間違いなく間に合うだろうな」

「いってくる」

それから本気で走って、分校にぎりぎり遅刻しないでついた。

「間にあった」

木造の学校なんてそうみれるもんじゃないなと思いながら職員室の扉を開けた。

結局その日は俺が授業をすることになって1日中体育をすることにした。

そろそろ昼食の時間か、切り上げましょうか。

「皆さん、４時間目はもうおわりにして昼食にしましょう」

「「「「「「「はーい」」」」」」」

さすが小学生、中学生元気がいいなと思いながら。

～昼食～

「ハンバーグいただき」

「させませんわ」

「僕がいただくのです」

「梨花ー」

俺からみた昼食の風景は戦争だった。

主に梨花、沙都子、魅音、圭一、レナ、詩音のグループは本当に戦争だったね。

「元気だねー。さて、5、6時間目の授業はっと」

その日は特になにもなく平和に終わった。

その後普通に家に帰った。

「ただいま」

「お帰りなさい大将」

「澪、ただいま」

「夕飯出来てますよ」

「あぁ」

「俺も歳か。腰が痛い」

「まだまだ現役でしょ」

「残さず食べてくださいね」

どんどん

玄関の扉が叩かれる。

「きたな」

「行ってこい」

「頑張ってくださいね」

かちゃ

「どうも梨花さん。なんのご用でしょうか」

「貴方に言われたこと考えたわ。やっぱり仲間とこの運命を打ち破りたい！皆と笑って過ごしたい。だから力を貸して」

「その目と言葉を待っていた。もちろん協力する。そして君の素晴らしい仲間にも手伝ってもらう、危険だから巻き込みたくないなんていわせないぜ。村の危機なんだ皆と戦わないとな。ところで聞きたかったんだが、後ろにいるのはオヤシロ様ってやつかい」

「！見えるのですか？」

「見えるけど、ほら触れられるし」

「梨花、梨花！」

「どうしたの」

「梨花に触れられるのです」

「どうゆうこと」

「寛に触られた時に急に重力を感じたのです」

「え！？」

「なんだ俺がやらかしたのか？まぉ何にしても、面白くなってきたな。その羽生ってやつにも手伝ってもらうぜ」

「なんだか、何が来ても勝てるような気がしてきたわ。奇跡しか起きてないようなきが。同じサイコロの目しか出ていないような」

「悪魔のシナリオなんか書き換えればいい。固い壁は爆弾で壊せばいい。運命？そんなもん圭一がいったとうり金魚救いの網より簡単に打ち破れる。こんな簡単なことにきずけた奴が最後は勝てるのさ」

「梨花！僕は傍観なんてつまらないことは止めます。それこそ燃え尽きるまで全力で戦うのです」

良い目してるじゃねぇか。さて敵さんにどんなバットエンドが待っ

てるか楽しみだぜ。

物語は次の日に続く。

～第四話～運命？鼻であしらてっやるよ。（後書き）

次回作も中二病全開でいきます。

～第五話～熱い展開になってきたね。炎の妖精が登場？（前書き）

今回の駄文っぷりはぐんをぬきますよ。

～第五話～熱い展開になってきたね。炎の妖精が登場？

～翌日～

「おはよう」

「おはようございます」

「うーーん」

まだ朝なので流石の軍人もまだ寝ぼけてるらしい。

「朝食ですよ」

「どうも。・・・・」

だんだん頭がはっきりとしてくる。

待てよ。ここは俺がいた世界とは違うんだよな。なんで澪がいるんだ？

「なんで澪がここにいるんだ？」

「そんなこと言われても困りますね」

穏やかにさも当然のように言う。

「冷静に返されても」

「俺もびっくりした」

「そりゃあね。っと仕事だ行ってくる」

「澪が来てるということはαチームも来てるのか」

「南２０ｋｍの地点に待機させてます」

「人数は？」

「５２５人ですね。全員Ｍ４カービン、ジャベリン装備です」

「相変わらずだな」

～学校～

「皆さん席に着いてください。今日は新しい転校生が来ました。それでは自己紹介をお願いします」

「はぅあぅ、ふ、ふ古手羽生なのです。よ、よろしくお願いしますなのです」

「ではどんどん質問しちゃってください」

羽生は質問攻めにあって終始あぅあぅしていた。

うーん大丈夫だろうか。いや絶対大丈夫か。

「寛ありがとうなのです。寛は僕達に大切なことを教えてもらいました」

「たいしたことはしてませんよ。これも大人の役目です」

「もう何が起こっても絶対に諦めないのてす！！」

「その意気だ」

「皆で奇跡を起こしてしまうのです」

「なんか久しぶりに血がたぎってきた。熱くなってきたよ」

「人間熱くなったときが本当の自分に出会えるんだ。だからこそもっと熱くなれよー！！」

「「「「「！？何（ですの。ですか。）」」」」」」

「ははは。何とも言えないね」

炎の妖精が熱気につられてやってきたようだ。

「奇跡か、そんなに簡単に起きたら、神様もせいぜい迷惑だろうな」

～放課後～

「今日は特に何も無いので、部活をやっても大丈夫です。では、皆さん、事故怪我に気をつけてくださいね」

「はーい」

皆走って教室を出ていく。

「はろろーん。来ちゃいました」
「よし、じゃあ今日は何をしようか」
そんなやりとりをしてると羽生が教室に入って来た。
「どうしたの羽生？忘れ物？」
「その、あの、そのあぅあぅ。ぼっ僕も部活に入れてほしいのです」
「とんだ奴がいるもんだね。我が部に自分から入って来るとは。しかしはいそうですかと言うわけにもいかない、そこで諸君に是非を問いたい。羽生君に入部試験をしてもいいと思う人」
「レナは異議なーし」
「私も賛成ですわ」
「羽生はよく言えたのですよ。ぱちぱちなのです」
「部活メンバーが増えるのか。いいんじゃないか」
「楽しそうだね」
「寛先生なのです」
「先生が来ると勝てないんだよなー」
「今日は何をやるんだい？」

「羽生君の入部試験ということでジジ抜きとする。これは初心者にはきついけどやるかい？」

「もちろんなのです」

目茶苦茶にしてやろう。

魅音がカードを配る。

「ふぅ」

このため息の瞬間、彼方と羽生以外の部活メンバーの敗北が決定した。

平たく言えばイカサマである。

カードを見るのはたいして難しいことじゃない。

「あがり」

「あがりなのです」

「うぉぉ」

この勝負はもちろん俺が勝ちました。

「今日もぼろ勝ちだったな。大人気ないかもしれないが」

時は進み三日後

「なぜ鷹野が？」

「思い出したのです、動機はわかりませんが」

「どうすればいいのかしら」

「仲間に話すのです。ありのままに」

「仲間にありのままに話す？成る程。そういうことね。もう諦めたりしない、仲間は最後まで信じる！」

「そのいきなのです。どうせなんだから皆巻き込んでしまいましょう」

～次の日昼休み～

「皆に聞いて欲しい話があるのですよ」

「何々？」

「寛先生にも聞いてほしいのです」

「僕も？わかった話を聞くよ」

まだ弁当食いかけなのに…。

食いながら話を聞けばいいのか。

「実は僕が今描いてる漫画でアイデアが詰まってしまったので皆に聞きたいのですよ。』

「漫画を意外だね」

「その話がある村の少女が巨大な陰謀に立ち向かう、話なのですが、悪役の設定がいまいちなので皆に相談したかったのです」

「うーんそうだね。まず・・・」

まぁ1時間くらい話をした。

「いい設定シナリオじゃないかい」

「皆のおかげなのです。みー」

「いやー、良い話になりそうだね」

「流石、想像力が豊かですね」

「先生電話が来てますよ」

「ありがとう今行くよ」

すぐに、職員室に向かい受話器を取る。

「もしもし」

「私です。言い忘れていたんですが、αチームが５２５人、９８式歩行戦車が１０輌で、野戦砲が２０です」

「ありがとう、位置は？」

「雛見沢から南に２０ｋｍのところに待機させています」
「いつでも出撃出来るように、待機させてくれ」
「わかりました。今夜はステーキですよ♪」
がちゃ
何かいいことあったのかな？
「さて、パーティーのはじまりか」
～職員室外～
「なんか言ってたか」
「穏やかな話じゃ無いみたいだね」
「と、言うと？」
「少し聞こえたけど。野砲とか戦車とか」
がら！
急にドアが開く。
「皆なにしてるんですか？」
先程とは打って変わって本当に疑問を持っているような、顔をする。
あまりにも自然な反応に、皆は普通に返す。

「今日の部活はどうしようか皆で話していたところなんです」
「そういえば梨花さんは？さっきまでいましたよね」
「用事があるとかで帰りましたよ」
「じゃあ、僕もこれで」
さて、神社にさっさと行くか。
～古手神社～
「鷹野さんが、ありえないよ」
「おぉ、やってるやってる」
近くの草むらにささっと隠れる。
「調べるだけで良いのです」
「どうでしょう駄目元で調べてみては。白だったらよし、黒だったら東京に報告し、指示を仰げはいい」
「わかりました、そのために僕が送られて来てますからね」
「冨竹、自分のみのまわりには特に気をつけてほしいのです」
「たしかに鷹野さんが黒だった場合を考えれば、一番に危険なのは冨竹さんですからね」

「わかりました、入江機関には内密に、宿を変えます」

良い感じに話が進んでるじゃないか。

「どうもどうもこんにちは。おや珍しい組み合わせですね」

「大石さん」

「今日は梨花さんのお知り合いの方を連れて来ましたよぉ。五年もたってますからもしかしたら忘れてしまってるかもしれませんね。きっと泣いちゃいますよ」

「あ、あ」

「やあ久しぶりだね梨花ちゃん」

「赤坂、赤坂ー！」

「梨花ちゃん私は無条件で君の味方だ。どんな突拍子の無い話も、信じるよ。それと遅くなってごめん、あの時の君を私は一回忘れてしまったかもしれない、でも今は梨花ちゃんの元に駆け付けられたことが私はとても嬉しいよ」

「よくも、五年も待たせやがったのです」

少しの間梨花は赤坂の胸で泣いていたが今は落ち着いている。

「挨拶が遅れました。警視庁の第七資料室から来た赤坂衛と申します」

「第七資料室…警視庁の中でも極秘の部門ですね」
「よくご存知ですね」
「いやぁ少し興味があるだけでして」
嘘をつけないタイプの人間だな。
お人好しっぽそうだもんな。
「お互いかくしっこなしなのです」
「大丈夫だよ。梨花ちゃん冨竹さんのことも入江所長のことも全て知っていますよ」
「そうだったんですか」
「私はあくまでも休暇で来ていますから、大丈夫です安心なさってください」
「その情報は何処から？」
「あれは去年の今頃ですかね。匿名で書類をもらいました」
「それはもしや」
「想像してるとおりだと思います。入江機関から盗まれた、書類です」
「やはりそうでしたか」

「では去年から知っていたんですか」
「そうなりますね」
「入江機関の書類と言えば、山狗の車が大破したあの」
「間違いないと思います」
「少しいいですか」
「みぃ？何なのですか？」
「そこにいる奴出てこい」
「そんな声ださなくても」
「寛先生なのです」
「なにをなさってたんですか」
「気になったもんで少し盗み聞きしてました」
「・・・・・・」
赤坂は彼方を睨んでいる。
ただ者ではない。学校の先生にしては気が大きすぎる。
「まさか見つかるとは思いませんでしたよ」

「寛先生は味方なので大丈夫なのです」
「こっから俺の仕事が入って来るんで。ちょっと失礼」
バックから何かの書類をだし、赤坂に差し出す。
「これは」
「霞ヶ関。といえばわかりますかね」
「あの事件は他の部署に回されました」
「ところが神様は許しても俺は許せない。だから、ちゃんと、部署は第七資料室になってるはずですよ」
「流石ですね。巷じゃ有名ですよ、伝説の情報屋としてね」
「活動は自粛してたんですが」
「では寛先生があの事件を?」
「そうなります」
「みかけによりませんね」
「寛先生はただものではないのですよ」
「相当な腕前の方だとお見受けしました」

「素手よりも武器を使って戦う方がとくいでして」

赤坂は思った『素手でも私は勝てないだろうな』と

「若造の勝手な意見ですが、大石さんはここで降りられた方がいいかと」

「そりゃあどういうことですか」

「大石さんは今年で定年です。このやまはかなり大きくなるでしょう。下手をすれば退職金が吹っ飛びます」

「僭越ながら僕も赤坂さんの意見に同意です。大石さんはここで降りられたほうがいい」

「なっはっは、若い人達に諭されちゃいましたね。昔の私なら保身に走っていたでしょうが、今の私は、おやっさんの敵をうつのを楽しみにしてたんですよ」

「大石」

「園崎家の仕業じゃ無いのは分かってるんです。入江先生、おやっさんいや、連続怪死事件は入江先生たちはご存知なんですか」

「はい全て私たち側から、説明できます」

「私のこの5年間は何だったんでしょうね。オヤシロ様の使いと呼ばれるまで、あちこちを駆け巡って」

「本当なら秘匿なのですがこの事件が終わったらすべての真相をお

話します。よろしいですよね、冨竹さん」

「僕は何も聞いていなかったので」

冨竹は立場上、こういうしか無いのだ。

「何か話がだんだん大きくなってますね」

「できれば何処かに隠れていたいのですが。不審な男がいれば警戒されますから」

「家なら、大丈夫ですよ。他の人も住んでるので」

「僕は園崎家に隠れようと思うのです」

「あそこは大きい上に地下室まであるって話ですからね。立て篭もるにはいいかと」

「僕は皆に事情を話すのです」

物語は最後に動き出していた。

～第五話～熱い展開になってきたね。炎の妖精が登場？（後書き）

変な方向に力を入れて頑張っていきます。

～第六話～作者が大好きな場面。（前書き）

ｎｉｃｅ駄文。もうどうしようもありません。

～第六話～作者が大好きな場面。

赤坂さんが入江先生との緊急時の連絡の取り方を説明した後、家に向かっていた。

「疲れた」

「寛先生は、何故雛見沢に？」

「頼まれたからです」

「どなたに？」

「ご存知のとおり梨花ちゃんですよ」

「そうだったんですか」

「といってもたいしたことは出来ませんが」

「格闘技かなにかされてるんですか？」

「だいたい喧嘩技ですかね。後、柔道やボクシング、プロレス、空手ムエタイ、軍隊格闘様々とりこんで自分でアレンジしてるんです」

「それだけじゃないですよね。確かに若く見えますが、場数は私より上なのは見ればわかります。特殊な訓練をされてるのがわかりました」

「特殊といえば特殊ですがね。着きましたよ」

「大きい家ですね」

「作るのも大変でした」

「大将、ご飯冷めますよ。あっ、赤坂衛さんですね。事情は伺ってます」

「寛さんの奥さんですか？」

「いやですね、大将のことですから、一生結婚してくれませんよ」

「ごほん、ごほん」

わざとらしく咳をする。

「中へどうぞ」

「どうも、お邪魔します」

部屋に入って席につく。

「あれっ、スネークは？」

「まだ帰ってきてませんよ。今日は遅れるそうです」

「今日はなんで、ステーキなんだ？」

「なんとなくですよ」

「あのお名前を聞いてもよろしいでしょうか」

「ごめんなさい、私ったら。私、工藤澪と申しますよろしくお願いしますね」

「よろしくお願いします」

「ご馳走様」

「ずいぶん早いんですね」

「早食いが特技でね」

「お風呂に入ってください」

「了解」

風呂場まで歩いていく。

「彼は何者なんですか？」

「それは言えません、言うと私が大将に怒られてしまうので」

「はぁ、そうですか」

がちゃ

「今、戻った」

「お帰りなさい。どうでしたか」

「兵員が増員になってるな」
「二回目ですか」
「何をするつもりなんだか」
「私にはわかりませんが」
「こっちの男は？」
「私、警視庁から来た赤坂衛と申します」
「例の第七資料室のか。俺はスネーク、よろしく頼む」
「こちらこそ」
ピーガガ無線がなる。
「本部、本部応答してください」
「こちら本部」
「先程、第二砲兵中隊と第一装甲小隊と合流しました。また、村の観測地点を確保」
「了解しました。次の指示があるまで待機してください」
「了解！交信を終了します」

「今のは？」
「気にしないでください」
「・・・」
「今のは無理があるだろ」
「何か言いましたか？」
「「なにも！」」
「風呂空いたぞ早く入れ」
「俺が入る」
「布団は何処でしょうか」
「こちらです」
「はぁ、俺もう寝よう」
「俺も早く寝たい」
「風呂で寝るなよ」
「わかってるさ」
「さてパーティーまで、後何日かな」

〜翌日〜

「じゃあ仕事ですので」

「いってらっしゃい。ふふ」

なぜ笑う

〜学校〜

「今から朝のホームルームを始めます。北条さんと古手さんは？」

「風邪で休みだそうです」

「わかりました」

風邪なんかひく子達だったかな？まぁ、いいか後で見舞いでも行こう。

「先生、放課後家に来てもらえます？」

「はぁ、まあ構いませんが」

〜放課後園崎家〜

「こちらです」

「どうも。用件は何なんですか？」

「あちらの部屋でお話しますので」

「・・・」

だいたいわかるが。

障子を開ける。

「先生が来ましたわ」

「なのですよ」

「あぅあぅ」

「まだまだ面白くなりそうだな」

「そうだね圭一君の言うとおりだよ」

「座ってください」

「はい」

「梨花ちゃん説明してあげてくれ」

「とっくの昔に知っているのですよ」

「そうだったのか」

「そういうこと」

「ついに本性を表すのですよ。にぱー」

「あれは仕事だから真面目にやってるだけで、決してキャラを作ってるわけじゃないんだ」
「そうなのですか？」
「そうなのですよ」
「普通に喋っていい？」
「いいと思いますよですよ」
がら
障子が開く。
「皆さんどうも、こんにちは」
「どうでしたか」
「あっさりとＯＫだしてくれました」
「よしっ！！いよいよだな」
「よし、ここに４８時間作戦の開始を宣言する」
「何がどうなってんの？」
「先生にも説明しないとね。かくかくしかじか」

「なる程で俺は何をすればいいんだ？」
「できれば私達と一緒にいてほしいけど」
「やっぱりか、知恵先生にも言っておいたし問題ないぞ」
「よしっ先生が味方となれば無敵だね」
「確かに」
「ところでちゃ、いや武器はあるのか？」
「もちろん、家には地下があってそこにあるんだ～」
「なるほど」
～翌日入江診療所裏口～
「くっ」
入江は自分の車を走らせる。赤坂に緊急連絡をし、自分は興宮まで逃げ切る。それがさくせんだった。
「雲雀状況を伝えろ」
「7丁目の林道を走行中、最悪街に抜けます」
「街にはいかせるな」
「雲雀了解。攻撃する」

パン

乾いた音がする。

キーぎゃぎゃーガッシャン。

「入江所長を捕まえるぞ」

～その頃～

「ふふん」

「ご機嫌ですね、詩音さん」

「だって、４年に一度の綿流しのお祭りですよ。どうやってお姉をからかうか考えると楽しみでしょうがありませんよ」

「はぁ」

「葛西、あれ」

「入江所長のようですが」

「葛西車止めてください」

車が止まる。

「監督大丈夫ですか？すぐに診療所に」

「それは困ります。園崎家に」

「詩音さん訳ありのようです。タイヤに弾痕が」

「わかった、すぐにいきましょう。監督歩けますか？」

「大丈夫です」

「葛西車を出してください」

「わかりました、年のため、後ろの確認を」

「了解」

～園崎家～

「そろそろかなぁ？」

「大石さんが上手くいけば。それよりも、冨竹さんのほうが重要な役割だが」

「冨竹のおじ様が私達の命運を握ってるなんて、変な気分だね」

「彼は銃の命中率が高い、緊張せずに照準を敵に持って行くことが出来る。鍛練された兵士だ。とても自衛隊員とは思えないな」

「へぇ～、すごいんだね」

「魅音冷静に返すところじゃないぞ」

「そうだ、俺が敵だったらどうするんだ」
「あるぇー、おじさんいつの間にいたの」
「悪いが、無駄話をしているヒマはない。寛はどこにいる？」
「あっちだよ」
「どうもありがとう」
「何者なんだ？」
「寛先生の知り合いだから悪い人じゃないと思うけど」
「まあそうだろうけど」
「寛」
「スネーク何かあたっのか？」
「山狗が増員した」
「ほんとか？」
「あぁついさっき確認された」
「よし行くぞ」
どたどたと部屋を出ていく。

「魅音さん。用事が出来ました。すぐに戻ります」
「わ、わかりました」
「何かあったのかな」
「さぁ？」
といいつつカメラに写ってる、映像を見る。
「詩音？あぁ祭だからきたんだね。もう少し空気を呼んでほしいよ」
「あれ監督じゃないのか？」
「何かあったのかな。行って見よう」
皆も呼んで外に出る。
「詩音！」
「お姉、何かあったんですか？」
「説明は後、追っては？」
「追ってはなかった」
ぶーん。
車が来る音がする。

「つけられてんじゃん、詩音の馬鹿ー！」
「つけられてないもん、お姉の馬鹿ー！」
「喧嘩は後にしろ」
「葛西さん、監督を地下室に」
「わかりました」
「よしいくよ」
「「「「「応！」」」」」
皆地下室の方に走っていく。
「いたぞ。うわ！」
「気をつけろ、辺りはトラップだらけだぞ」
「うわ、何だこれは。何か落ちてきたぞ。岩だ！逃げろ」
「ちっ、しかしこの園崎家って奴はとんでもない金持ちだな。広すぎて包囲は不可能だ」
「本部応答されたし」
「なんだ」
「トラップにより、約半分が戦闘、行動不能」

「くそっ」

「隊長、防空壕のような場所を発見扉は鋼鉄性でびくともしません」

「八方塞がりか」

「室内ようのプラ爆がありますが使いますか？」

「プラ爆、おい祭の開始合図は何時だ」

「１０時です」

「よし使えるぞ。伸管を用意しろ」

～寛家～

「こいつの出番だ」

「９８式戦車か」

「あぁ、一台作っておいた」

「これに乗るのか？」

「あぁ、こいつで園崎家に向かう」

一方その頃園崎家では、梨花を引き渡す代わりに、皆を助けるといって地上に上がって行ったところだった。

「捜しましたよ、梨花さん。貴女は大事な身なんですから、いきなり姿を消されちゃたまりませんね。では梨花さんは診療所まで来てもらいましょうか。・・いけ」

その瞬間山狗が走っていく。

「約束を破る気!?」

「約束ぅ?そりゃあ何のことですんね」

「くっ!」

走って逃げようとするが、小此木に腕を捕まれる。そして隊員が梨花に猿ぐつわをする。

「本当に舌でも噛まれちゃたまりませんからねぇ。おぃ!」

隊員が注射器を取り出す。

信じてる、最初に目を開いて目にするのは私の愛しい仲間達なんだ。

「のおわぁ!」

かしゃん。

注射器を持っていた、男が吹っ飛ぶ。

「お、お前何者だ!」

「間に合った」

「いくつもの世界で後悔した。いつもきずくときは手遅れだった。
それは１００年にも勝る誓い」

「梨花ちゃん、君を、助けにきた！」

「赤坂！」

「いけぇ！」

最初の二人の男は裏拳で粉砕される。その男達は宙をまった。赤坂
はも後ろを向いたまま吹っ飛ばしたのだ。
インカムで増援を呼んだのだろう、２、３０人地下から戻って来る。
隊員は小此木の瞬きひとつで２人ずつ飛ばされてる。
流石に隊員も浮足立ってる。
そんなとき、隊長小此木か、前にでる。他の奴には手をだすなと合
図をして前に出る。

「鳳１こと山狗の小此木だ」

「戯れ事はいい。さっさとこい」

と言った瞬間小此木の懐に潜り込む。小此木はとっさに防御する。
小此木は思った。空手屋じゃないのかと、今のはあきらかに空手で
はなく中国拳法の類だ。

「お前空手以外にも何かやってるな」

「私は空手いがいにはなにもやっていない。しいて言えば、昨日少
し習ったくらいだ」

「そいつはすげえなぁ。きっとその教えた奴は達人だろうな」

小此木はわかっていた勝てないということを。格が違いすぎるのだ。もう上を見ても、見えないくらいの高見にいるのだ。

「勝てねぇ、勝てねぇよこんな奴に」

しかし、諦めてかえるわけにも行かない。小此木は覚悟を決めた。

「いくぞ」

赤坂のところまで走ってパンチ蹴りをかますが、全て避けられたり、いなされたりした。

「軽い」

そういうと、小此木にパンチのラッシュをし、小此木を吹っ飛ばす。

「ふぅ」

息をつく、しかしそんな隙を小此木は見逃さない。気合いをいれて全力でパンチする。

「てぇやあああ」

ばす。

鈍い音がする。

「軽いな、本当の拳を教えてやろう」

小此木は思わず後ずさりをする。

「てぇりゃあああ」

バンのフロントガラスを木っ端みじんにする。逆のガラスも全部吹っ飛ぶ。

「ひぃぃ」

流石に山狗も逃げだす。小此木も気絶から回復し、バンに乗って逃げようとする。そのとき、隣の誰も乗ってないバンが爆発し吹っ飛ぶ。

「戦車だ」

「嘘だろ」

流石に抵抗をやめ全員逃げ出す。

「皆無事でよかったのです」

「葛西さんが、気絶した振りをして反撃のチャンスを作ってくれたんだ」

「奇跡のおかげね」

「奇跡じゃないのです。皆か、力を合わせたからなのです」

「このていどで、奇跡じゃあ安すぎるわね」
「さぁ今度はこっちがうって出る番なのです」
「大丈夫そうだな」
「強いな、彼らは」
「力じゃなく本当の強さを持ってるんだ」
「ひさしぶりに面白くなってきてるな」
「まったくだ。よし戻るぞ」
何が始まるんです？
第一次雛見沢戦争だ！！

～第六話～作者が大好きな場面。（後書き）

まだまだ駄文ですが頑張ります。

～第七話～沙都子のターンそのトラップはまさに、核ミサイル。（前書き）

今回で終わりですが、次回作があります。お楽しみに。

～第七話～沙都子のターンそのトラップはまさに、核ミサイル。

赤坂が梨花を助けた後、彼方達は家に帰って次の準備をしていた。

「αチーム１応答せよ」

「こちらα１」

「雛見沢に１０ｋｍ前進。戦闘態勢いつでも出撃できるように、準備を」

「α１了解」

「澪」

「わかってますよ」

「明日に備えて寝るか」

「だな」

特に緊張などもなく、そのまま寝た。

～翌日裏山～

「おいでなすったね」

「何人の方が、この山を降りられるかしら」

「我ら部活メンバーを敵に回したこと後悔させてやるよ」
「にしても思ったより数が多いな」
「どういうことなの羽入」
「わからないのです。でも、この世界は何かが違うのです」
「面白いじゃない、私たちが集まれば何でも出来るってことを証明するチャンスね」
「いよいよ、クライマックスなのですよ」
「じゃ行こうか」
「おう！」
〜入江診療所〜
「これで全員ですか」
「思ったよりもかなり数が多かったですね」
「山狗部隊は昨年今年と増員になっていましたから」
「わかっていたんでしょうか、こうなることを」
「いえ、昨年増員されたのは、書類が盗まれたため。今年はもう一度あるかもしれないので、念のためにと」

「それに山狗だけじゃなくほかの組織も動いている」
「半数以上無傷で気絶させるのは難しいでしょう」
「かなり実戦経験があるようですね」
「地下の兵力は？」
「一階とはまったく違って、８人しかいませんですが、短機関銃で武装してるんです」
「厳しいですね、葛西さんの散弾銃があるにしても、火力が違いすぎますね」
「赤坂さん、機関銃の経験は？」
「昨日、習ったばかりです」
「昨日ですか」
「寛先生に」
「そうでしたか。園崎本家でも、軍人という噂がたえませんでしたからね」
「一応は使えます」
「それでも火力に差がありますね」
そのとき

「ＧＯＧＯＧＯ！」
「なんでしょう、今のは地下の方からですよね」
「爆弾でしょうか」
「これにじょうじて突入というのは？」
「賭けになりますが、やってみる価値はあります」
「じゃあいきますか」
「急ぎましょう、本隊が戻ってきたら厄介です」
入江達は地下室に走っていく。
「木っ端みじんですね」
「鋼鉄製の扉が」
葛西が扉を抜け管理室の扉の横にたつ。続いて赤坂もたつ。葛西がゆっくりと扉を開く。そこには、倒れた山狗だけがいた。
「1、2、3、7人」
赤坂がきずいたころにはもう影から山狗が銃で詩音を狙っていた。しかしそれは呆気なく阻止される。
「このガキャア」

「ひぃ」

銃を蹴飛ばす。

「雑魚が、何ちゃかぶらさげとるんじゃ、ぶち殺されてぇのか」

「か、葛西あんたひぇー」

「こんなまねは二度としないつもりでしたが、忘れて下さい」

「詩音さんこっちです」

「はい」

〜部活メンバー視点〜

山狗は沙都子が仕掛けたトラップにとことん引っ掛かっていた。

「はは、笑っちゃうね」

「魅音さんこちらはかたずきましたわ」

「こっちもだ」

「こちら白鷺8高台から大量の丸太が」

「こちら鴬18足が鉄線に掛かって動けない、番線カッターを持ってきてくれ」

「こちら白鷺４５大量の落とし穴と、催涙ガスで身動きが取れません」

「逃げろ、この山には鬼が住んでるんだ」

「まだ死にたくない」

「くそ。全班につぐこちらもかなりの被害がでているしかし、敵を着実に追い詰めている。ここが正念場だ」

「こちら白鷺攻撃を受けた。隣の奴が脳震盪だ。あんなの辺り所が悪かったら死ぬぞ」

「隊長、バリケード斑からです」

「なんだ！」

「突破されたそうです」

「くっそやつらの狙いはこれだったのか」

「無線を聞くにかなり混乱してるみたいだね」

「さっきの心理戦もきいたな」

「何か無線が混雑してるね」

「こちらα１診療所の制圧に成功。これより裏山に向かいます」

「了解しました」

「本部、本部応答せよ」
「どうした」
「山の麓に戦車が」
「本当か」
「伏せろ！！」
「向こうはかなり凄いことになってる見たいだね」
「番犬が出動したのか？」
「そんな感じじゃありませんわ。まるで別の敵が来たみたいな」
「何かしゃべってるよ」
「山狗部隊につぐ、直ちに武器を捨て投降せよ。それに応じない場合は、どちらも望んではいない結果になるだろう」
そのとき轟音が鳴り響く、ヘリが飛んできたのだ。
「戦闘ヘリだね」
「待たせたな」
「寛先生」

「何、何なの」

彼方が飛び降りる。

「ちょっと権力を濫用しただけさ」

「軍人だったのかよ」

「あなたのシナリオどうりだったってわけね」

「まだまだ、この劇はまだ終わってない。俺のシナリオは皆が幸せになることだ」

「でも惨劇は回避されたのです」

「お前らはな」

「鷹野ですか」

「そうだ、あいつはまだ幸せになってない。俺は一番差別が嫌いでね。だから平等にしてやるのさ。じゃちょっと行ってくる」

「僕も行くのです」

～移動中～

「なんで、私ばっかり、こんな目にあうのよ」

「そりゃあ運が悪かったのさ」

「あ、貴方は。貴方も私を裏切ったの」
「いや、そんなことはしない。だって俺は夢を応援するといったんだから」
「でも貴方は。私の計画を邪魔した」
「残念ながら、２０００人も人が死ぬのを黙って見てられないんでね」
「ならせめて貴方だけでも、みちずれにするわ」
「どうやって？」
「こうやってよ！」
ばん
ピストルから弾が一発放たれる。
部活メンバーが走ってきたときはもう遅かった。
「寛ー！」
「はっはっは。あんたの死にかけた、弾じゃあ何発撃ってもしにゃあしないよ」
「うう」
「大丈夫、あんたが世の中のババなら俺もババになってやる。そう

すれば、カードはそろう」

「無理よ」

「信じてないな。せっかく東京の野村をクビにして、東京のプロジェクトに反対してる奴と入江機関を裏金ルートとして使ってる奴を逮捕して刑務所にぶち込んだのに」

「私はどうなるの」

「研究だよあんたの好きな」

「東京が私を生かしておくはずないじゃない」

「大丈夫無敵のボディーガードが守ってくれるさ。ねっ、冨竹さん」

「鷹野さん。』

「ジロウさん、ジロウさん。うぇーん」

「鷹野さん・・・」

鷹野は冨竹さんの胸で泣いていた。冨竹さんは子供をあやすかのように、頭を撫でている。

「一見落着だな」

「先生大丈夫ですか」

「４５口径じゃ何発撃たれても死なないよ」

「新たな伝説が出来そうだね」
「何にしても、これで終わったんだな」
「梨花ちゃーん」
「赤坂、赤坂」
梨花は赤坂に飛び込む。
「赤坂赤坂、赤坂赤坂赤坂」
「梨花ちゃん、遅れてすまなかったね」
「いい感じだな。αチーム撤収だ」
αチームは一瞬で撤退する。
〜翌日〜
「盛り上がってるな」
「ふふっ元気でいいですね」
「おっきたね。澪さんも初めてだからって手加減しないよ」
「澪は普通に強いから油断してると足元を掬われるぞ」
「もう少しいい、言い方をしてください」

「沙都子、祭に行くならそう言ってくれんと、てっきり行方不明になったかと思ったわ」

部活メンバー全員が驚く。あの鉄平が沙都子に普通に接しているのだ。普通というよりは過保護と言った方がいいかもしれない。沙都子は事情を説明した。

なんでも急に現れて謝ったらしいのだ。悔い改めて、沙都子と一緒に悟史の帰りを待つつもりらしい。沙都子は最初こそ怯えていたものの、すぐに打ち解けあった。

「これも、幸せかな」

「大将らしからぬことを言いますね」

「うっ、別に変なことは言ってないよ」

「冗談ですよ」

「むぅ」

「よしじゃあ鉄平もいれて九凶爆闘いくよ」

「おおやってるやってる」

こういう感じで楽しくお祭りは続いていった。

「そろそろかな」

人間、出会いあれば別れがある。まさにその通りである。

「寛、いってしまうのですか」

「悪いな、俺にもまだやり残したことが、山ほどあるんだ」

「そうですか」

「寛、寛梨花を救ってくれて、ありがとうなのです」

「俺はやりたいことをやっただけだ、礼を言われるようなことはしてない」

「謙遜なのです」

回りが少しずつ明るくなってくる。

「寛先生、って何してるの」

「寛先生？」

「悪い、俺帰らなきゃいけないんだ」

「嘘だろ、なんで急に」

「待ってくれなくてさ」

「トラップを避けてくれる人がいなくなったらどうすればいいんですの」

「そうですよ。いきなりなんて酷いですよ」

「寛は薄情者なのです」
「はは、元気だな。皆いい顔してるよ。俺は幸せ者だ」
「寛先生ずるいよ、レナ達に何も言わずに帰ろうとするなんて」
「寛先生、部活楽しかったです。だから忘れないでください」
「たとえ記憶を失っても雛見沢の事だけは忘れないよ」
さらに光りが強くなる。
「「「「「「寛先生ありがとう！！」」」」」」
「最後に俺の本当の名は※※※※※」
「えっ」
梨花がそういったときもう彼方は光に吸い込まれていた。
「羽入聞いた？」
「はいしっかりと」
「なんて言ってたんだ？」
「本名をいっていました」
「きっと仲間って認めてくれたんじゃないかな」

「本名って？」

「佐々木彼方」

「そうかなんかうれしいな」

「圭ちゃん、泣いてるよ」

「魅音だって泣いてるじゃないか」

「そうですわ」

「神様みたいだったね」

「確かに、な」

その頃彼方は

「うお眩し！」

ぼと。

「もうちょっと親切に落としてくれよな。ここは家か。帰ってきたのか」

しかし物語はまだまだ続く。

次回作、彼方のなく頃に蛇無双～どきっなんだこれは～に続く。

～第七話～沙都子のターンそのトラップはまさに、核ミサイル。（後書き）

好き勝手やった、後悔はしている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0447m/

彼方のなく頃にタイムスリップ編

2011年4月7日10時54分発行